

(様式 1)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」
平成 28 年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

推進地区名	協力校名	児童生徒数
五條市	五條市立五條小学校	174
	五條市立牧野小学校	485
	五條市立宇智小学校	135
	五條市立五條中学校	144
御所市	御所市立大正小学校	245
	御所市立葛上中学校	71
宇陀市	宇陀市立榛原小学校	304
	宇陀市立菟田野中学校	94

○ 実践研究の内容

1. 推進地域における取組

(1) 授業力の向上

① 確かな学力の育成に係る実践的調査研究

五條市、御所市、宇陀市を推進地区に指定し、各地区・学校の実態に応じた実践的な研究に基づいた課題改善のための取組を行った。取組の概要については以下のとおりである。

・平成29年1月16日（月）第2回学力向上実践研究推進協議会

各地域・地区・学校の取組を報告し、成果と課題を検証し、共有するとともに、今後の研究成果の周知の在り方について協議した。

以上の協議会の他に、各推進地区及び協力校の要請に応じ指導主事を派遣し、指導助言を行った。また、本事業の取組の概要を示したリーフレットを作成し、県内全ての小・中学校に配布するとともに、Webページに掲載し、周知を図った。

② 奈良県学力・学習状況調査

学力や学習状況をきめ細かく把握・分析して、指導の効果・課題を検証するとともに、今後の学力等の向上のための施策の基礎資料とするため、小学4年生、中学1年生の全児童生徒を対象に実施した。

③ 学力向上支援サイト「まなび一奈良」の活用

分かりやすい授業を行うための教員の指導力向上のための取組として、子どもがつまずきやすい分野を取り上げ作成した小学校国語科、算数科、理科の授業モデルの動画配信を配信するとともに、授業で活用できる問題等の提供を行った。

④ 異校種間の円滑な接続を図るための研修の充実

同じ中学校区の小・中学校など異なる校種の教職員が一緒に参加する公開授業・授業研究等に指導主事を派遣し、小・中学校間など異校種間の円滑な接続とともに教員の研修機会の充実及び指導力の向上に努めた。

(2) 授業改善における学校全体での研修体制の構築

① 全国及び奈良県学力・学習状況調査の調査結果の活用による指導改善に向けた説明会

本年度の全国及び奈良県学力・学習状況調査の調査結果から明らかになった本県の児童生徒の課題の改善に向けて、9月には市町村教育委員会に対して、10月には教員に対して、指導改善のポイント等についての説明会を開催した。今年度は特に、国語、算数・数学における課題を踏まえ、調査対象学年や教科の教員だけではなく、学校全体の課題として、全ての教科等でその解決を図る取組を考え実行することや、実践を検証し、次につなげるためのカリキュラム・マネジメント及びPDCAサイクルの一層の充実を図るよう指導した。また、これらの説明

会を受け、12月には全国及び奈良県の調査結果を踏まえた各校の取組を募集した。寄せられた課題克服のための取組を当課で取りまとめ、平成28年度奈良県学力向上フォーラムで報告した。

②学力向上フォーラム

本年度の学力向上フォーラムでは、カリキュラム・マネジメントとPDCAサイクルの意義について、奈良教育大学教授小柳和喜雄氏から講演をいただき、学校全体で取り組む必要性について周知を図った。また、県内小・中学校における学力向上のための効果的な取組を報告し、各校における指導改善の手立てとした。さらに、学力向上における各校の取組状況や課題などについて参加者同士で協議を行い情報交流を図った。

(3)家庭学習の推進

①「家庭学習の手引き」の作成

平成28年度に小学4年生とその保護者向けに作成した「家庭学習の手引き」について、各学校等からの意見も踏まえ、自ら学ぶ力を育むための学習習慣の形成にはより早い段階からの啓発が必要であると判断し、来年度は、小学1年生から配布できるようにするよう手引きを改訂した。

2. 推進地区における取組

(1)五條市の取組

①児童生徒の家庭学習習慣の定着に向けた取組

ア 「五條市生活リズムチェック表」等を活用した生活リズムの定着とアンケートの実施

市内各校では既に市で作成したもの、又は学校独自の「生活リズムチェック表」を活用して基本的な生活リズムの定着を図っている。市では「指標アンケート」を作成し、モデル校において生活習慣や家庭学習習慣の定着について検証を行った。このアンケートは平成29年度には市内全小中学校で6月と12月に実施し、短いスパンでPDCAサイクルを機能させ、課題改善に向けた方策を早期に行う手立てとする。

イ 自主学習ノートを活用した小中連携した取組の推進

協力校において、自主学習ノートを活用した家庭学習習慣の定着を図る取組を実践し、その取組を検証するとともに、自主学習ノートの取組推進に向けた「学力向上プロジェクト提案会」を開催した。

ウ 保護者啓発パンフレットの配布

全国学力・学習状況調査の結果や生活習慣や家庭学習習慣と学力とのクロス集計、児童生徒の自主学習ノート等を掲載した保護者啓発パンフレット「五條市の子どもに『確かな学力』を育もう」を作成し、市内保育所、幼稚園、小・中学校の保護者と教員、地域の方々に配布した。

②教員の授業力（教師力）向上に向けた取組

ア 「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業プランシート」の提案

昨年度、学力向上プロジェクトで作成した「五條市版授業モデル」を一部改訂し、主体的・対話的で深い学びを実現するための『授業プランシート』を作成し、活用例を示しながら研修会を行った。

イ 現場の教員の自主運営による「教師塾」の実施

授業力・教師力を向上させるため、現場の教員による自主運営のもと、本年度も年間5回の教師塾を実施した。本年度は、「道徳の教科化に向けて」、「コーチングから学ぶコミュニケーション力」、「先輩や同僚教員から学ぶ」等の研修を行った。

ウ 9年間を見通したカリキュラムと「指導の重点概要シート」の作成

市教科等研究委員会において、小・中学校教員で9年間を見通したカリキュラム及び五條市の子どもたちに付けたい力とその力を育成するための「指導の重点」を示したシートの作成を行った。次年度は冊子にまとめる予定である。

エ 市内共有フォルダー「お役立ち情報局」の活用推進

各校における「家庭学習の手引き」、「自主学習ノートの手引き」等の成果物、研修会資料等を市内共有の教育ネット上にある「お役立ち情報局」に掲載し、各校の取組を共有した。また、日々の授業の参考になるよう授業プランシート例や指導案例も掲載している。今後は9年間を見通したカリキュラムや「指導の重点概要シート」も掲載する予定である。

(2) 御所市の取組

① 全国及び奈良県学力・学習状況調査等の結果分析を踏まえた学習指導の改善

ア 推進校交流会の実施

全国及び奈良県学力・学習状況調査の分析結果と取組の交流を行う推進校交流会を平成28年11月15日に実施し、各校の課題や効果的な取組の共有、市全体の課題やカリキュラムマネジメントの必要性等の確認を行った。

② 教員の授業力向上

ア 研究発表会の実施

本実践研究の成果を市内の学校で共有するとともに、講義を通して新たな取組のヒントを得ることにより、本市の学力向上に資することを目的として平成29年2月14日に研究発表会を実施した。対象は、市内小・中学校管理職及び学力向上担当教員等。

イ 実践事例集の発行

各推進校の実践研究の中で優れた授業実践を実践事例集にまとめ、年度末に市内小・中学校の全ての教員に配布する予定。

ウ 授業力向上サポーター事業の実施

市教育委員会が本市教員より授業力向上サポーターを委嘱（今年度は国語科、外国語活動担当の教員2名）し、市内教員の希望や当該サポーターの希望に応じて、授業提供を行ったり、指導助言を行った。

エ ICT授業の推進事業の実施

県立教育研究所ICT教育推進係と連携し、電子黒板や書画カメラ等のICT機器、デジタル教科書を活用した学習指導の研修会を市内小・中学校3校で実施し、児童生徒の学習意欲を向上させる授業づくりの支援を行った。

③ 家庭学習における保護者との連携

ア 家庭教育推進事業の実施

規範意識の向上や、家庭生活の基本的な習慣の定着を図るため、「御所市家庭教育の手引き」を作成し、新1年生の全保護者に配布した。活用状況調査から、市内全1年生の98%の保護者がこの手引きを参考にしているとの結果を得た。（平成29年2月23日現在）

④ 自尊感情、規範意識の向上と集団づくりの推進

ア TFP（宝物ファイルプログラム）の共同研究

本市の児童生徒の自尊感情の醸成のため、大阪大学大学院岩堀氏の上記プログラムを市内小・中学校4校（協力校の大正小学校、葛上中学校も実施）で実施した。

イ 中学生キャリア教育フォーラムの実施

市内の中学生が一堂に会し、自分の夢を実現するための進路について考えるために上記フォーラムを平成29年2月2日に開催した。本市出身の現役プロボクサーや文化財技師のキャリアストーリーや高校の進学ガイダンスを通して、将来の夢の実現のための意欲を育むとともに夢に向かって努力することの大切さを再認識させる機会となった。

(3) 宇陀市の取組

① 学びの創造UDAプランの推進

ア 推進委員会（各校園所ごとに1名の委員）の開催

イ 宇陀市学力・学習状況調査（小学5年生と中学2年生が対象）

② 指導主事による1～5年目までの全教諭の授業参観・指導助言

③ 宇陀市家庭教育リーフレット（就学前版、小学校版、中学校版）作成、全保護者配布

3. 協力校における取組

(1) 五條市立五條小学校

算数科を中心に言語活動の充実を通して課題解決を図る授業の工夫について研究を進めた。

①言語活動を重視した授業展開

全校でノート記述の基本スタイルを統一し、思考する場面や算数での適用問題等で自分の考えを具体的に記述させるとともに、記述図や式、言葉を使って説明することを重視して取り組み、授業改善を図った。

②「五夢りん学びの教室」の実施（補充学習の場の設定）

放課後や長期休業中での補充学習において、系統的な学習システム体制をつくり学力の定着を図った。また、地域ボランティアの活用を積極的に行った。

③家庭学習習慣の充実

自ら進んで学習する習慣の確立を目指し、家庭学習の手引きやノートモデルなどを提示し、家庭とも連携しながら学習習慣の形成に取り組んだ算数に関する知的好奇心を刺激し、具体的な操作を通して学習意欲の向上と学力の定着を図った。

(2) 五條市立牧野小学校

言語活動の充実を通して主体性を育み、学力の向上を図るため、国語科を中心に研究を進めた。

①伝え合う力の育成

全国学力・学習状況調査の調査結果から「情報の読み取りや活用する力」に課題があることを受け、情報を読み取り活用を図る点を重視した言語活動の充実を図る授業研究を行った。

②五條市図書館司書と連携した読書向上活動

読書貯金や家読（うちどく）、図書館司書による国語科関連図書のブックトークや並行読書、絵本の広場などの取組を推進し、読書への意欲の喚起を図った。

③主体的な学習習慣の形成

家庭学習の手引きの活用を図るとともに、自主学習のモデルを提示したりしながら、予習や復習など主体的に学習を進める態度の育成を図った。

(3) 五條市立宇智小学校

自分の考えを伝える力の育成に向け、算数科を中心に見通しと自分の考えをもつことができる授業研究を進めた。

①交流を大切にした授業改善

児童が見通しと自分の考えをもって授業に臨めるよう、「宇智小授業スタイル」の確立を目指し、モデル化を進めた。特に自分の考えをもつ場面や交流する場面の工夫に取り組んだ。

②モデルノートの提示

家庭での学習習慣形成を図るため、モデルノートを提示するとともに、児童の工夫を積極的に評価し、廊下等に掲示して望ましい自主学習の在り方について例示した。

③「おもしろさんすう広場」の設置

算数教具や算数クイズなど、楽しく遊びながら算数に親しめる環境作りに配慮し、算数科への意欲の喚起を図った。

(4) 五條市立五條中学校

授業改善を通じた基礎的・基本的な学習内容の定着と家庭学習の定着を図るための研究を進めた。

①話し合い活動におけるホワイトボードの活用

各教科等における話し合い活動の充実を図るため、磁石付きホワイトボードを活用して意見の集約や交流を図り、深い学びへの手立てとした。

②自主学習の推進

生徒に自主学習用ノートを作成させ、1日1ページを共通目標に自主学習に取り組むことを通して学習習慣の育成を図った。

③土曜塾の開催

昨年度の課題を踏まえ、今年度は対象学年を主に3年生とし、開催時期も2学期以降とした。また、今年度は開講教科を数学に加えて社会、理科の3教科とした。

(5) 御所市立大正小学校

国語科を中心に「聴く」力の育成を図りながら、自尊感情を醸成し学習意欲を高める研究を

進めた。

①話し手に体を向ける聴き方のスキルを習得

全職員が「聴く」ことを意識しながら、学級指導や全校集会の場を通して、話し手に体を向け、傾きながら話を聴くことを指導した。

②国語科を中心に聴き合い、学び合える授業づくり

県の指導主事や外部講師を招聘し国語科の校内授業研究会を行い、毎時のめあての確認や学習を振り返る場面など設定する国語科の授業モデルを作り、各学級で実践した。

③児童の興味・関心を高めるための授業内容、授業方法の工夫

地域の方や企業に協力を求めながら、地域の特定野菜づくりや、商業施設での職場体験、などの体験的な学習を取り入れた授業を取り入れた。

④児童のコンピューター活用能力を高める

児童自らがインターネットを使って調べ、発信できる技能を身に付けるために、学年に応じたコンピューター活用能力を高めるよう系統だった指導を行った。

⑤岩堀美雪氏の理論によるパーソナルポートフォリオ（宝物ファイル）の実践

全校体制で取り組んだ。個人ファイルを持たせ、自分の宝物（写真、賞状、テストなどをファイリングしていった。また、家族や学級の児童からの評価（いいところ）も書いてもらい、同様にファイリングしていき、自己肯定感を高めていった。

(6) 御所市立葛上中学校

各教科等において生徒が見通しをもち主体的に学ぶための授業づくりをテーマに研究を進めた。

①めあてと振り返りの徹底

ホワイトボードなどを活用して「目当て」の提示をした。「振り返り」に関しては、先進校視察なども行いながら、「まとめ」と「振り返り」の違いについて教職員間で協議した。

②考える力、伝える力の育成

昨年度より行っている「問題解決的な授業の学習過程」の活用により、「解決活動」の時間を充実させることができてきた。

③中学校区での合同研修

今年度から、中学校校区で2小1中の学力向上担当者が集まり、奈良県学力・学習状況調査や全国学力・学習状況調査の調査結果の分析を行った。その中で、校区の児童・生徒に共通する課題や、学力向上に向けての悩みを交流し合った。

(7) 宇陀市立榛原小学校

算数科におけるユニバーサルデザインを生かした授業づくりについて研究を進めた。

①算数アンケートの実施

算数アンケートを実施（3年生以上）し、算数科における児童の実態把握に努めた。

②榛原小デザインプランの作成

具体物や半具体物の作成や、ノートの書き方のパターン化、またヒントコーナーの設定等ユニバーサルデザインの視点から、全ての子どもが自分の考えをもてるよう具体的な方法を考え、実践した。

(8) 宇陀市立菟田野中学校

生徒の学習意欲を高め、基礎的・基本的な力の定着とともに学習習慣を育成する研究を進めた。

①学力向上に係る研修の実施

ア 全国及び奈良県学力・学習状況調査の結果を踏まえ、本校の生徒の強みと課題の視点から分析を行う。

イ 国語、数学での課題を全ての教科等につなげ、全ての教員で克服する手立てを考える。

ウ 全教科等で授業のUD化を進める。

エ めあてを基に見通しを立てた主体的な学習を進め、できた喜びや達成感を実感できる授業づくりを研究する。

②研究授業の実施

ア 校内公開授業(英語・数学・美術・道徳)

イ 校区内小学校と授業研究における合同研修

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

(1) 授業力の向上

①学習パターンの確立

協力校の多くで問題解決型の学習のパターンの確立や教員全体での共有が見られた。パターン化は、形骸化をもたらす危険性もはらむが、一定の型が与えられることにより、教員も研究への見通しをもつことができ、その型の中で教員個々の創意工夫が生まれることも期待した。その結果、めあてと振り返りの徹底、自力解決を図る場面、交流する場面などについて、研修を深め授業スタイルを構築する過程を通して、継続的な授業改善を図ることができた。

②図書館司書との連携

図書館司書と連携し、学校図書館の活用を促進したり、地域の人的資源を活用して授業を充実させる取組を行ったりすることができた。本の主人公や作者との対話を通じた協働的な学びや、効果的な資料から新たな考えを創造する深い学びにつなげていくことが今後も期待できる。

③交流場面におけるホワイトボードの活用

子どもの思考の可視化を図ることにより、話合いの論点が明確になり、子どもも協働的に学ぶ意義やより実感を伴う深い学びにつながることを期待できる。

④中学校区での合同研修

全国及び奈良県学力・学習状況調査の調査結果分析を共同で行い、校区の子どもの課題を共有することにより、9年間を通じた計画的・組織的な子どもの資質・能力の育成を図ることが期待できる。

(2) 家庭学習の推進

①家庭学習モデルの構築

県や市、また学校独自の家庭学習の手引きの活用を図りながら自主学習モデルを提示して、家庭における学習の内容や方法をについて提示した。保護者に対しても、家庭学習の意義を説明し、家庭や学校外における学習習慣形成を推進することができた。

②補充学習の充実

放課後や土曜日、長期休業中における学習の場を設定することにより、子どもの基礎的・基本的な知識や技能の定着とともに学習習慣の定着を図ることが今後も期待できる。

2. 実践研究全体の成果

本年度、本県では、教員の授業力の向上、授業改善における学校全体での研修体制の構築、家庭学習の推進を重点課題に、学力向上推進の取組を行ってきた。

各推進地区や協力校においても、そのような視点から、それぞれの実態に応じた実践を積み重ねてきた。学習意欲に関して、各協力校で重点を置いた教科等は異なるものの、各校で独自に行われたアンケート調査の結果から、本年度の取組の中で概ね成果が見られた。

教員の指導力向上については、その成果を客観的な数値で測ることができなかったが、各推進地区や協力校を中心に、共通の課題意識のもと、授業研究等が推進されており、教員の指導力向上が図られたと推測できる。また、各学校の研究授業等の研修に対し指導主事を派遣する要請訪問について、中学校区単位での訪問要請に対する他校からの平均参加学校数は約2.5校(昨年度2.2校)、他校からの平均参加者数は約3.9名(昨年度3.3名)と伸びている。さらに学力向上支援サイト「まなび一奈良」の閲覧について教員等からの問合せが増えている。

家庭学習の推進については、本県においても県内の学校や団体からの意見も取り入れ、「家庭学習の手引き」を改訂し、29年度は小学1年生から配布することとした。また、県の手引きとともに各推進地区や多くの協力校における「家庭学習の手引き」も基にして、できるだけ具体的に家庭学習の内容や方法を提示し、保護者や児童生徒に対して啓発を行った。

3. 取組の成果の普及

(1) 学力向上フォーラムの実施 平成29年1月30日(月)

県内市町村教育委員会及び小・中学校より約250名が参加した。カリキュラム・マネジメントとPDCAサイクルの意義について周知を図るとともに、県内小・中学校における学力向上のための効果的な取組を報告し、各校における指導改善の手立てとした。報告には推進地区や協

力校の取組も取り入れ、研究成果の普及に努めた。

(2) リーフレットの作成

本年度は、推進地域による学力向上のための取組の概要を示したリーフレットを作成し、県内各市町村教育委員会、各小・中学校に配布する予定である。

(3) 学力向上支援サイト「まなび一奈良」の活用

これまでの学力向上事業の知見を生かした授業モデル動画や、学力フォーラムでの配布資料、また上記リーフレット等、学力向上に関する情報を掲載し、指導主事要請訪問等様々な場で紹介または視聴し、教員の授業力向上等の手立てとした。

○ 今後の課題

各学校において「目指す子ども像」を実現するには、全国学力・学習状況調査等から見いだされた課題を、当該学年や当該教科だけのものではなく学校全体の課題として捉え、身に付けさせるべき資質・能力を設定する必要がある。それらの資質・能力の効果的な育成には、学年間の縦のつながりと教科等間の横のつながりを踏まえカリキュラム・マネジメントが重要である。また、実施した取組を定量的に評価し、検証して改善を図るPDCAサイクルの充実を図る必要がある。カリキュラム・マネジメント及びPDCAサイクルの充実には、学校全体で課題を共有し、教員が相互に連携を図りながら取り組むことが重要である。このような学校全体での研究体制を構築する意義と方法についての取組が引き続き求められる。

(様式2)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名 (推進地域)	奈良県	番号	29
-----------------	-----	----	----

推進地区名	五條市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

- 児童生徒の家庭学習習慣の定着
- 教員の授業力（教師力）の向上

2. 研究課題への取組状況

（1）児童生徒の家庭学習習慣の定着に向けた取組

【「五條市生活リズムチェック表」等を活用した生活リズムの定着とアンケートの実施】

市内各校では既に学校独自の「生活リズムチェック表」を活用して基本的な生活リズムの定着を図っているが、依然として長時間テレビやゲームをしている児童生徒の割合や家庭学習習慣が身についていない児童生徒が多くいることから、まだ実施していない学校や生活リズムチェック表の改訂を考えている学校に、市で作成した生活リズムチェック表の活用を促した。また、次年度からの本格実施を前に、モデル校において市独自の「指標アンケート」を実施し、生活習慣や家庭学習習慣の定着について検証を行った。このアンケートは平成29年度には市内全小中学校で6月と12月に実施し、短いスパンでPDCAサイクルを機能させ、課題改善に向けた方策を早期に行う手立てとする。

【自主学習ノートを活用した小中連携した取組の推進】

協力校において、自主学習ノートを活用した家庭学習習慣の定着を図る取組を実践し、その取組を検証するとともに、自主学習ノートの取組推進に向けた「学力向上プロジェクト提案会」を開催した。また、提案後には中学校区の教員で集まり、家庭学習習慣の定着に向けた取組について情報交換を行う機会を設けた。その後、年度内には改めて、各中学校区において自主学習ノート等を活用した9年間を見通した家庭学習習慣の定着に向けた話し合いの場を設定するよう各校の管理職や学力向上担当教員に指導した。

【保護者啓発パンフレットの配布】

全国学力・学習状況調査の結果や生活習慣や家庭学習習慣と学力とのクロス集計、児童生徒の自主学習ノート等を掲載した保護者啓発パンフレット「五條市子どもたちに

『確かな学力』を育もう」を作成し、市内保育所、幼稚園、小学校、中学校の保護者と教員、地域の方々に配布した。生活習慣や家庭学習習慣の定着を図るチェック表も掲載し、家庭において点検するとともに、小さい頃からの習慣形成の重要性について啓発する内容を記載した。

（２）教員の授業力（教師力）向上に向けた取組

【「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業プランシート」の提案】

昨年度、学力向上プロジェクトで作成した「五條市版授業モデル」の活用促進を図っている中で様々な課題も見られたことから、昨年度の授業モデルを一部改訂し、主体的、対話的で深い学びを実現するための『授業プランシート』を作成し、活用例を示しながら研修会を行った。特に、授業終末の「まとめ」や「振り返り」について課題が見られることから、モデル校での実践をもとに学力向上推進委員会でも協議を行い、研修会においても「まとめ」と「振り返り」に焦点を当てた説明を行った。

【現場の教員の自主運営による「教師塾」の実施】

授業力・教師力を向上させるため、現場の教員による自主運営のもと、本年度も年間5回の教師塾を実施した。本年度は、「道徳の教科化に向けて」「コーチングから学ぶコミュニケーション力」「先輩や同僚教員から学ぶ」等の研修を行った。教師塾では、学力向上の基盤となる学級経営や生徒指導等幅広く研修内容を設定し、授業力だけでなく指導力や教師力の向上にもつながる内容を設定した。若手だけではなく、ミドルリーダーやベテラン教員の参加も増え、市内教員の貴重な情報共有の場となっている。

【9年間を見通したカリキュラムと「指導の重点概要シート」の作成】

市教科等研究委員会において、小・中学校教員で9年間を見通したカリキュラム及び五條市の子どもたちに付けたい力とその力を育成するための「指導の重点」を示したシートの作成を行った。市教科等研究委員会では、研究授業や研修会を小中合同で開催しているが、小・中学校の連続性を意識した指導が日々の実践で行えるようにすることを目的としている。市や県の指導主事等からの指導助言をもとに、次年度は冊子にまとめる予定である。

【市内共有フォルダー「お役立ち情報局」の活用推進】

各校における「家庭学習の手引き」「自主学习ノートの手引き」等の成果物、研修会資料等を市内共有の教育ネット上にある「お役立ち情報局」に掲載し、各校の取組を共有した。また、日々の授業の参考になるよう授業プランシート例や指導事例も掲載している。特に、協力校における取組については積極的に掲載するよう促し、協力校の取組を市内各校の実践にも活用するよう呼びかけた。

今後は9年間を見通したカリキュラムや「指導の重点概要シート」も掲載する予定である。

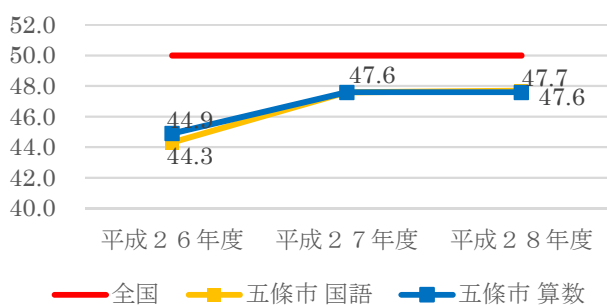
3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 市・県・全国学力・学習状況調査の結果分析をもとにした検証

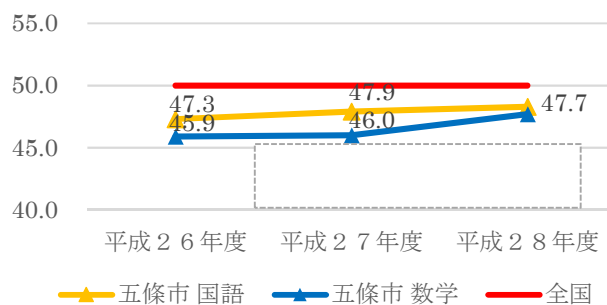
標記調査について、それぞれ経年比較や同一集団・同一学年による比較及び標準偏差を用いての比較等を行い、市全体としての取組の成果や課題を把握した。全国学力・学習状況調査の結果については、国語A B、算数(数学) A Bともに全国平均を下回る結果となったが、市や県の標準学力調査も交えて標準偏差による同一集団比較(経年比較)を行った結果、徐々にではあるが学力が向上していることが分かった。また、小学校では学校の予習や復習をする児童、家で自分で計画を立てて勉強をする児童の割合が昨年度と比較して高くなっていった。また、長時間テレビを見たりゲームをしたりする児童生徒の割合についても昨年度と比べると減少傾向にはあるが、依然平日や休日に全く勉強をしない児童生徒の割合は全国を上回っていた。

さらに、分析業者に依頼して専門的かつ詳細に分析を行い、その内容をもとにした研修会を実施した。分析結果からは、児童生徒の意欲が学力に反映されていないこと等から、教員の授業力及び児童生徒の家庭学習習慣の定着等に依然課題があることが分かった。これらの課題については、来年度から実施予定の「指標アンケート」等を用いて、日常的にPDCAサイクルを機能させることや、中学校区での取組の推進、市の学力向上推進モデル校の増加等により解決を図っていく。業者による最終分析報告書については市内全校に配布するとともに、各校の課題とも照らし合わせて具体的な計画を立てて課題解決を図るよう例年実施している「学力向上ヒアリング」の際に指導を行った。

標準化得点に見る経年変化
(同一集団：H28年度小学6年生)



標準化得点に見る経年変化
(同一集団：H28年度中学3年生)



(2) 指標アンケートの実施による検証

全国学力・学習状況調査の結果から課題となっている質問項目を抜粋した「指標アンケート」を、本年度は試行として、協力校及び学力向上推進委員の在籍校の小学校4年生から中学校3年生までの児童生徒に12月に実施した。市内全校に実施していないため一概に比較はできないが、アンケート結果からは、4月に比べ、家で授業の復習をする児童生徒の割合や家で自分で計画を立てて勉強する生徒の割合が高くなっていった。一方、小学校から中学校に上がるにつれ、授業の理解度が下がっていることや家庭学習習慣の時間が短くなっていること、また、授業の「めあて」や「振り返り」が実施されていたと回答する児童生徒の割合が低くなっていること等の課題が見られた。次年度は、この指標アンケートを6月、12月に市内全小中学校に実施する予定をしている。

4. 今後の課題

学力・学習状況調査の結果は、昨年度と比較すると全国平均を下回っていた。しかし、同一集団で比較した場合に学力の低下は決して見られないことから、「教員の授業力向上」と「児童生徒の学習習慣の確立」が引き続き今後の課題であると考えます。

この2つの課題解決を図るためには、本年度示した「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業プラン」の活用促進及び授業への指導助言の充実や、中学校区での家庭学習習慣の確立に向けた取組の推進を一層図ることが重要である。具体的には、授業プランに基づいた研究授業を市内各校が実施し、協力校が中心として公開することや、「自主学習ノート」等の活用促進に向け、各中学校区の取組を把握し指導助言を行う。

今後も、小中学校の学びの連続性を意識した取組を一層推進し、具体的な成果が得られるよう指標アンケートを有効活用しながら学力向上に向けた取組を進めていく。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

協力校名	奈良県五條市立五條小学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

H27年度全国学力学習状況調査の結果は、ほぼ全国平均までポイントが近づいたものの、文章を読み込んで思考したり、自分なりの考えを文章化して表現したりするといった面での弱さが課題として残った。また学習状況の面では発展的に学ぼうとする意欲の低さが見られた。これらの現状を踏まえ、問題解決型の授業スタイルづくりに取り組んだ結果、児童アンケートで「学習(授業)は分かりやすい」と答えた児童の割合は低・中・高学年とも85%を上回った。しかし、低学力傾向の児童が解消されたわけではなく、学力2極化の課題は依然残されている。また、保護者アンケートの結果からは「学習の手引きを活用している」という割合が55%に留まった。家庭生活や家庭学習と学力との相関関係を明らかにしながら、家庭の理解と協力を求め、更なる推進に取り組んでいかなければならない。

そこで、今年度は、研究課題を「自ら学び、共に高め合う子どもの育成～算数科を中心とした言語活動の充実をはかる指導の工夫～」として設定し、特に次の2点を重点課題として研究を推進することとした。

- ①低学力傾向児童への、自尊感情を視野に入れた支援について検証し、自己肯定感の向上にともなう学力の底上げをはかる。
- ②話し合い、練り合いながら問題解決に向かう言語活動を重視した授業研究に取り組む。

本年度のキーワードは、「できた」「わかった」からその先を目指し、「あっ!」「そうか!」「なるほど!」(感嘆詞のある授業)である。

2. 協力校としての取組状況

● 言語活動を重視した授業展開

各教科において話し合いや発表の場を積極的に設け、言語活動を充実させることで思考力・表現力についての課題解決をはかった。全校でノート記述の基本スタイルを統一し、考えの場面や算数での適用問題等で自分の考えを具体的に記述させるとともに、記述図や式、言葉を使って説明することを



多く取り入れた。また、全国学力学習状況調査の問題を職員研修で分析、検証し、特にB問題を意識した授業展開の工夫に取り組んだ。



● 五夢りん学びの教室

放課後や朝の時間、長期休業中に「五夢りん学びの教室」を実施。Sプリントの導入で各児童個別の学び直しをシステム化した。また地域ボランティアの協力を得ながらつまずきのある児童の支援や放課後学習サポートの充実をはかった。

● 家庭学習習慣の充実

自ら進んで学習する習慣の確立を目指し、家庭学習の手引きや、ノートモデルを提示して、家庭の協力を得ながら充実に取り組んだ。また、低学年からの系統立てた自主学习ノートについて検証を進め、実施に取り組んだ。



3. 取組の成果の把握・検証

- 言語活動を重視した授業展開の成果として、最初はあまり書けなかった児童も少しずつではあるが自分の考えや思考の道筋を言語化してアウトプットし、順序立てて説明できるようになってきた。話し合いの場面も授業の流れの中に位置づけられ、パターンとして定着したことで子どもたちのスムーズな活動がみられるようになった。ただ、話し合いを更に練り上げていくことについては、これからの課題であると考えている。

さらに次のような項目に留意しながら、授業改善と学びの習慣化に具体的に取り組んでいった。

- ・授業の導入時に前回の復習をして児童の理解度をチェックする。
- ・学習の冒頭にめあてを示し、学習内容を児童に意識づける。
- ・事前に見通しを立てたり、事後に振り返ったりする活動を行う。
- ・児童間で教え合う、学び合いの場を設定する。
- ・机間巡視を積極的に行い、つまずいている児童に声をかけ、支援する。
- ・授業の中での、時間制限を設定しての学習活動。
- ・ICTを授業で活用し教材提示を工夫することで児童の理解度や興味関心を引き上げる。



このような工夫の結果、児童アンケートで「学習は分かりやすい」と答えた児童の割合は、昨年度同様に85%を上回り、本校の授業スタイル確立の成果が現れていると考える。（※「とてもあてはまる」だけを見ると58%となる。これを60%台に引き上げることを目標値としたい。）

- Sプリントでは児童がどこでつまずいているかが分かるので、教師は個別に課題把握ができた。また児童自身も自分の到達度を客観的にとらえられるようになり、学習の意欲付けとなっている。また、朝の時間（パワーアップタイム）にSプリントを行うことが学習へのアイドリングとなり、スムーズに授業に入ることができている。とアンケートで「パワーアップタイムに意欲的に取り組んでいる」をA評価（とてもあてはまる）とする児童の割合は昨年比で低92→97%、中27→45%、高21→51%と、子どもたちの充実感が増していることが分かった。

- 自主学習の定着化は低学年では一律には難しい面もあるが「自主学習の手引き」でノートモデルを示したことで、だんだんと取り組めるようになり、家庭学習アンケート(保護者向け)から低学年でも宿題以外で30分以上自主学習をするようになった児童がでてきたことが分かった(1年14%、2年27%)。中・高学年も、「自主学習の手引き」をヒントに、充実したノートを書けるようになった児童が増えている。良いノートの展示会や通信等を活用した保護者への発信を行うことで、一層意欲的に取り組めるようになった。また、「元気アップ週間」として家庭での生活習慣チェックを年間7回実施、家庭での様子を把握するとともに、集約結果を保護者へフィードバックすることで生活を整える意識付けにつなげることができた。

4. 今後の課題

- 授業改善への取組によって、おおむね本校の授業スタイルを確立することができたが、話し合い、練り上げていく場面での活動はまだ十分とは言えない。これまでの研究で作上げてきた課題解決授業の型を土台に、思考力、説明力、読解力、言語力、語彙力を確実に育てていくための具体的な取組を検証し、積み上げていけるよう、更に研究を重ねていかねばならない。
- 学力の2極化については、依然として本校の課題になっている。学力に限らず、様々な取組を行ってきた中で学力の比較的高い児童には効果があるものの、低学力の児童へのアプローチが薄いことが実感として職員の中で挙げられた。取組を行っていく中で、しんどい子に目を向け、どうアプローチしていくかが大切になってくる。来年度に向け、そこに視点をあてた取組を行っていききたい。
- 様々な取組をする上で、ベースになるのは「社会を生き抜く力を育む」という将来を見据えた取組であるという視点である。目の前の児童の学力を伸ばすということはもちろんではあるが、社会に出ることを見通して、そのために必要な力は何かを考えつつ取組を行って行く必要がある。
- 家庭学習の成果が児童のノートの充実に見えてきているので、今後も、家庭学習時間の増加とより質の高い自主学習ができるように継続した指導と工夫に取り組んでいきたい。また値打ちのある自主学習とはどのようなものか検証を深めていきたい。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

協力校名	奈良県五條市立牧野小学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

平成28年度の全国学力学習状況調査では、国語の平均正答率が、A、Bともに全国平均より下回った、平成26年度、平成27年度と続いて子どもたちの学力は高まっていたものの、依然として児童の学力における課題が浮き彫りとされた形になった。

平成28年度全国学力学習状況調査や本校独自のアンケートの分析から以下の項目が課題であると思われた。

- | |
|--|
| <p>a. 目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている。
→特に資料、グラフ等の読み取り</p> <p>b. 意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している。</p> <p>c. 自分の考えを書くとき、考えの理由が読み手に伝わるように気をつけて書いている。→中でも条件に基づいて自分の意見を書くこと。</p> <p>d. 文章を読むとき、段落や話のまとめりに内容を理解しながら読んでいます。</p> <p>e. 学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、読書を読みますか（教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）。→学年が上がるにつれて読書量、意欲の低下がみられる。</p> <p>f. 学校の授業時間以外に普段、1日当たりどのくらいの時間勉強を読みますか。
→家庭学習の質、量の不足</p> |
|--|

2. 協力校としての取組状況

今年度も昨年度に引き続き、国語の授業を工夫し、児童が授業の中で自分の考えを発表したり、書いたりする場面を十分に確保する授業作りを研究の柱とし、『自分の考えを主体的に伝え合う力の育成～言語活動の充実を目指して～』を研究テーマとした。研究では、国語科を中心とした「伝え合う力を高める」ための基礎に重点をおき、「単元を貫く言語活動」について研究するとともに、授業の充実を図った。その上で、全国学力学習状況調査結果から分かった課題の解決を意識した授業作りを行った。

また、家庭学習の質の低下と量の不足に対しては、自主学習の充実（特に高学年）を図ることを課題解決する手立てとすることにした。

そして、読書意欲の向上に向けて、昨年度より配置されている学校図書館司書との連携を深めることを中心に進めた。

以下の3つが主な取組の具体例である。

(1) 情報の読み取りや活用する力を高めるために

6年国語「町の幸福論」の学習において、わが町の将来についてのプレゼンテーションを行うにあたり、次の3点を重点的に行った。

A: 写真やグラフ、文章からの「情報の読み取り」

B: 他の町や自分が住んでいる自治会などの「情報整理の工夫」

C: プレゼンテーションへの「効果的な活用」

(2) 読書量を増やすために

読書貯金や家読、図書館司書による国語科関連図書ブックトークや並行読書、絵本の広場などの取組を行った。

(3) 家庭学習の時間を多くするために

予習・復習を中心に行う自主学習を充実させるために、「家庭学習の手引き」の活用の啓発や自主学習の方法とモデルを子どもたちに掲示して示した。



児童作成のスライド



東京書籍 新しい国語6 p133より

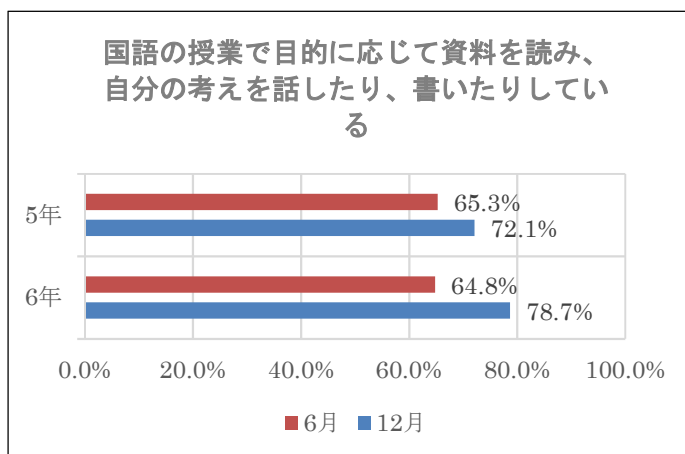


国語「海のいのち」関連図書の図書館司書によるブックトーク

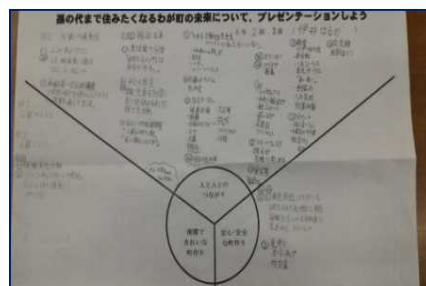
3. 取組の成果の把握・検証

(1) の取組について

A: 使われている写真一枚から「そこには何が写っているのか」「何を目的にその写真を選んだのか」などを子どもたちに話し合わせる活動に取り組んだ結果、今まで写真の細部にわたって観察し、深く意味を考えなかった多くの子どもたちも、それぞれの資料のもつ意味を考えるようになった。同様にグラフ等の読み取りにおいても話し合い活動を取り入れることで、高学年の子どもたちは「資料を読む」ということを意識するようになった。



B: 情報を大きく3つのカテゴリーに分けるために「Yチャート」(ワークシート)を使用し、資料から読み取れる内容をまとめた。5年生の「和の文化フェスタ」の学習など、各学年が実態に合わせて情報整理ツールを用いた授業を行い、資料の見出しに注目させたり、資料別に記号を決め出典が何かを簡単に分かるようにしたりするなどの工夫をしたため、



「Yチャート」ワークシート

情報の効果的な整理の仕方を身につけることができた。

C: 自分が述べたい主張のために、効果的な資料（現地の写真など）を現地に行って写真を撮ったり、保護者の方から提供を受けたりして用意し、プレゼンテーションに生かすことができた。

今までは、伝える情報を精査せず全て書き込んでいたため、何を言いたいのが分からない子どもも多かった。しかし、このような学習を通して、自分が他の人に伝えたい中心を考え、必要なことのみを書き込むことのできる児童が増えてきた。

(2) の取組について

「読書貯金」については、読書記録をつけることにより、子どもたちの読書意欲の向上につながっている。

読む冊数が増えるにつれて読書貯金の色が変わっていく（赤→ピンク→黄色など）ことが意欲につながり、特に下学年の児童は楽しんで読書に取り組むことができた。

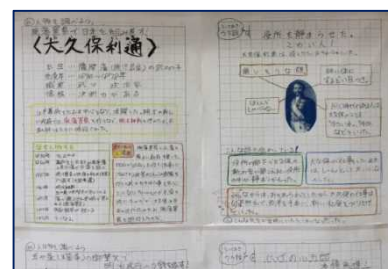
また、学校図書館司書による「ブックトーク」を行うことで、国語関連図書への興味が沸き、進んで並行読書をする児童の姿が多く見られるようになった。



積立読書貯金通帳

(3) の取組について

自主学習でどのような学習をすればよいかわかるように、モデルとなる児童のノートを掲示し、紹介した。この取組を毎日続けることで、学習した内容を自分なりにまとめたり、振り返ったりすることができる児童が増えてきた。また、世の中の話題にも目を向け、進んで自主学習に取り組む児童も見られるようになってきた。



掲示されている児童のノート：6年生

4. 今後の課題

本研究では、言語活動の充実を図り、自分の考えを主体的に伝え合う力の育成を目指した。その結果、子どもたちの読む力は徐々に高まってきたり、高学年に自主学習の習慣の定着が見られるようになってきたりしている。しかし、読む力に個人差があることや漢字の読みなどの基礎基本の定着が十分にできていないこと、高学年の読書意欲が高くないこと、中学年に自主学習が定着していないことなど、改善していかなければいけない課題も多く残っている。今後、本研究を更に検証し、これらの課題を解決するための方策を立て、子どもたちの伝え合う力を高めていきたい。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

協力校名	五條市立宇智小学校
------	-----------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

全国平均正答率との差				
	国語 A	国語 B	算数 A	算数 B
平成 26 年度	- 3. 5	+ 3. 6	+ 0. 9	- 4. 8
平成 27 年度	+ 7. 7	+ 5. 4	+ 2. 1	+ 0. 2
平成 28 年度	- 2. 1	- 1. 1	- 1. 8	- 2. 6

上記のように、本校は全国と比べて国語、算数ともに、H27年度より正答率がやや下がってはいるが、全国平均にほぼ近い。H26年度からみても、緩やかに上がってきていると考えられる。細かく分析をすると、国語では、漢字やローマ字といった基礎知識、算数では記述式での問題で課題が見られた。さらに、正答数分布グラフから、算数A Bともに二極化の傾向があることも明らかとなった。

この現状を踏まえ、研修主題を『**自ら考え、いきいきと伝え合う児童の育成 ～子ども自身が見通しと自分の考えをもてる算数科の学習を通して～**』とし、国語で培った言語活動の力を算数的活動にも生かして論理的に説明できる力を育てたいと考え、授業力の向上を中心に取り組んできた。

2. 協力校としての取組状況

【本校児童の課題】

- ① 根拠を明らかにし筋道を立てて体系的に考え、伝え合って考えを深める力
- ② 問題を解決しようと粘り強く考え抜く力
- ③ 学力の二極化

算数科授業の改善

算数科「宇智小授業スタイル」確立に向けて

- ・授業の流れをモデル化（問題解決型、ねらいを焦点化）
- ・「めあて」の掲示
- ・既習内容を常時掲示（説明に活用）
- ・学習過程の視覚化
- ・まとめ（子どもの声から拾う）
- ・自己評価（振り返りは記述で）

既習内容の掲示



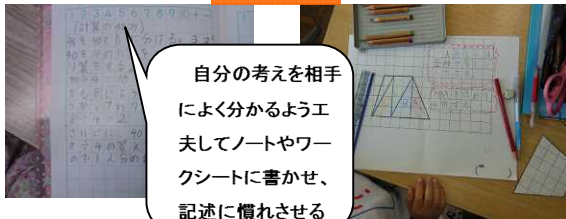
説明に既習事項が使える。

児童が自分の考えをまとめて書いたものも活用

意見交流を大事にした授業



書く



自分の考えを相手によく分かるよう工夫してノートやワークシートに書かせ、記述に慣れさせる

振り返り



記述式解答の課題対策に向けて振り返りは低学年から記述式を取り入れる

学習意欲の向上

モデルノートの掲示



ノート記入への意欲とスキルが高まるように、工夫ポイントに賞を付けて廊下に掲示

自主学习ノートタワー



自主学习ノートを意欲的に取り組めるよう高さの目標を決めて積み上げていく。

おもしろ算数クイズ

楽しく算数への興味関心を高めることができるよう、昇降口に算数クイズを掲示



おもしろ算数広場



わなげ（点数の計算）



算数すごろく



ボランティアの協力

計算カード



3. 取組の成果の把握・検証

算数科授業の改善（論理的に説明できる力を育てる）

- ・全職員で全国及び奈良県学力・学習状況調査の調査結果を分析したことで、本校の課題を共通理解し、目的意識をもって研修を行うことができた。
- ・授業の流れをモデル化して全学年が校内研究授業に取り組み、研究協議で次の授業研究に向けて課題を焦点化して授業力向上に向けてのPDCAサイクル確立を図ることで授業改善が進んだ。

- ・小学校若手教員育成研修システム開発事業を受けて取り組んだことは、若手教員の指導力向上に効果的であった。また、大学と教育研究所の先生方からの指導助言を校内研修に生かすことができ、宇智小の授業モデル化を確立させるための手がかりとなった。
- ・授業改善を進めることによって、「算数の授業がよく分かる」と答えた児童のアンケート結果が各学期で比べると以下のようになっている。

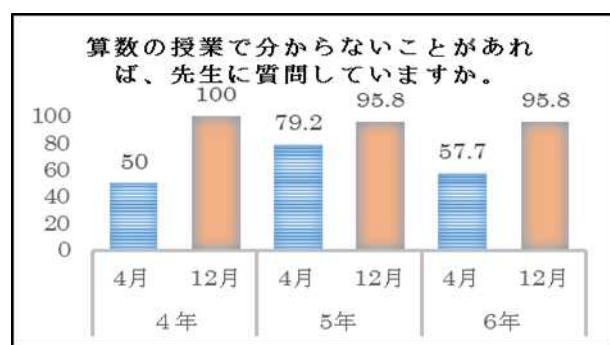
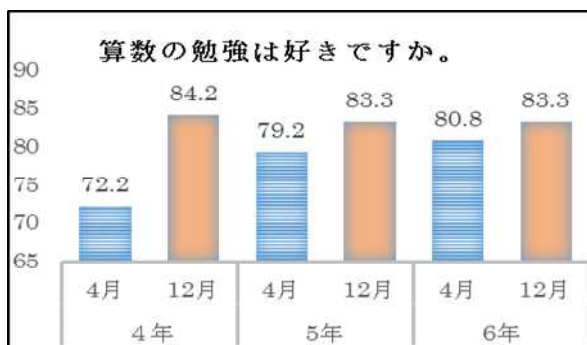
学 年	4 年			5 年			6 年		
学 期	1学期	2学期	3学期	1学期	2学期	3学期	1学期	2学期	3学期
算数の授業内容はよく分かりますか。	82.4	83.3	94.7	87.5	95.8	87.5	87.5	92.3	96.2

学力の二極化への対策

学習意欲の向上

- ・既習学習内容の教室掲示をはじめ、算数関連掲示物（面白算数クイズ、〇〇賞を付けたモデルノート）の校内掲示や、算数教室（おもしろさんすう広場）の新たな設置は、児童の意欲と自尊感情を高めることに効果的であった。
- ・学力の二極化を改善するために、夏休みを利用して低学力傾向の児童を中心に補充学習教室「サマースクール」を開催し、つまずきを解消して算数学習に自信をもって意欲的に学習できるよう基礎学力の充実に取り組んだ。「サマースクール」に参加した児童からは意欲と自尊感情の高まりをみることができた。
- ・授業中に可能な限り工夫をして支援の先生を配置することで、低学力傾向にある児童へのきめ細かな支援を行うことができた。

*4月と12月に行った児童アンケートにより、児童の意欲の高まりが確認できた。



4. 今後の課題

- 算数科の授業改善を通して児童の学習意欲と主体性を育てることができた。さらに自主性を高めていく指導方法について探る。
- T T体制で行う低学力傾向の児童への対応は効果的であった。次年度もできる限りT T体制を取り入れた指導を行っていきたい。また、日々の授業でのきめ細かい指導と、朝のかがやきタイムと自主学習の充実で基礎学力の充実を図る。
- 学力の二極化の改善に向けて一層取り組んでいくことが引き続き課題である。
- 「生活チェックシート」を学期ごとに行うことで、生活習慣を付け、心と体の調子を整えて意欲的に学習に取り組める力につながってきた。今後も継続して保護者と連携した取組を工夫していきたい。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

協力校名	奈良県五條市立五條中学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

平成27年度の全国学力・学習状況調査の結果から、国語Aにおける本校と全国平均との差は、2.0ポイントに縮まってきた。同様に、国語Bでは3.0ポイント差に、数学Aでは4.5ポイント差に、数学Bでは8.1ポイント差にとそれぞれ大幅に縮まってきた。また、本校定期テストにおいて5教科の合計点が100点以下の生徒数が、平成25年度の15名から平成26・27年度には6名と減少した。全国学力・学習状況調査の結果を分析し、授業改善や生徒の習熟度に合った適切な補充学習指導などの学習環境を整えることで、生徒の学習意欲が高まり、学力の向上に役立ったことを実証することができた。

また、すべての教科で「見通しと振り返り」「言語活動の充実を図ること」を意図的に取り入れた授業を行ったことにより、生徒同士で共に学び合う意識が高まってきた。

さらに、本校が独自で実施した生徒アンケートの結果から、以下の成果が見られた。

ア「今受けている授業では、授業の初めに目標（めあて・ねらい）が示されていると思いますか」

肯定的な回答をした生徒の割合が、平成26年度の63%から、平成27年度は74%へと上昇した。

イ「今受けている授業では、自分の考えを発表する機会が設けられていると思いますか」

肯定的な回答をした生徒が、平成26年度の64%から、平成27年度は78%へと上昇した。

ウ「生徒の間で話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか」

肯定的な回答をした生徒が、平成26年度の59%から、平成27年度は69%へと上昇した。

その一方で、課題としては以下のことがあげられる。

- ① 思考力・判断力・表現力の育成をより確かなものとするためには、言語活動の充実を基盤とした授業を行い、一人一人の生徒の適切な評価につながるよう研究を深める必要がある。
- ② すべての教科において、「見通し」と「振り返り」に重点を置いた授業を展開してきたが、「振り返り」の学習活動をどのように効果的に展開すればよいか、さらに研修を深めなけれ

ばならない。

- ③ 土曜塾は、部活動との兼ね合いを考え、開催時期や時間帯等を検討していく余地がある。
- ④ 家庭環境が複雑で、授業中や家庭での学習に集中出来ない生徒への支援について、習熟度別学習の形態や自習ルームの設置等を検討する。
- ⑤ 自分で課題を設定し、自ら学ぶ態度を育てるために、家庭での学習を充実させる。そのため生徒に自学自習用のノートを作成させ、継続してノート指導をおこなっていく必要がある。

2. 協力校としての取組状況

① 言語活動の充実に向けた取組

授業にホワイトボードを活用した話し合い活動を適宜取り入れ、言語活動の充実を図った。

② 「見通し」と「振り返り」の活動

「見通し」と「振り返り」活動の効果的な学習形態の研修を積むため、小学校での研究授業を全職員で参観した。小学校の授業ではより具体的に「見通し」や「振り返り」の場面が示されており、小学校の先生方との意見交流では、さまざまな「見通し」と「振り返り」の手法を学ぶことができた。



ホワイトボードを活用した授業の様子

③ 土曜塾の開催

昨年度の課題を踏まえて、今年度は開催の形態を検討した。主な対象学年を3年生とし、開催時期も2学期以降とした。昨年度は数学のみの開講であったが、ニーズに応える形で今年度は数学に加え、社会、理科の3教科で開講した。

④ 習熟度別の学習形態

さまざまな要因で、授業中や家庭での学習に集中できず、基本的な学習が身に付いていない生徒への支援として、朝の会を利用した基本問題の確認テストを実施した。一定の点数に到達していない生徒については放課後の学習支援をおこない、基本的な学習内容の定着を図った。



土曜塾の様子

⑤ 自主学習ノートの取組 →自主学習ノート例示

家庭での学習習慣の定着を目的として、1日1ページを共通目標に自主学習ノートに取り組んだ。学習課題は生徒自身が設定し、提出された自主学習ノートの点検やアドバイスは、全職員の協力体制で行った。

3. 取組の成果の把握・検証

① ホワイトボードの活用

ホワイトボードを用いた話し合い活動を多くの教科で取り入れた結果、話し合い活動に抵抗なく取り組むことが出来ている様子が見受けられる。

② 土曜塾

意欲的に参加する生徒が多く、3年生51名中、最大で16名の参加があった。それぞれの課題に応じての学習を行うことができる点において好評であった。

③ 習熟度別学習形態

数学の四則計算や漢字の書き取り問題など基礎的な課題を繰り返し行うことで、つまづきがみられた生徒も徐々に克服することができるようになってきた。

定期テストにおいて、5教科の合計点数が100点以下の生徒は全校生徒144名中5名となり、2年生にいたっては学年で100点以下の生徒が無しという結果であった。

④ 自主学習ノートの取組状況

当初、懸念されていた部活動との兼ね合いや家庭との連携については、保護者の積極的な関わりもあって、概ね問題なく取り組むことが出来ている。ノートの提出率は8割を超え、規定のページ数の1.5倍～2倍に到達する生徒もおり、予習やテストのやり直しなどとして意欲的に取り組むことが出来ている生徒が多い。

その一方で、自主学習ノートの内容についてはまだまだ十分とは言えない生徒もいる。どう活用すれば効果が上がるのかがわからないという声もあり、自主学習ノートへの継続的な取組や、他の生徒の有効的な事例を提示するなどして、個々に応じたノート指導を積極的にすすめる必要がある。

4. 今後の課題

- ① ホワイトボードを用いた話し合い活動によって授業の活性化を図るだけでなく、他者との意見の比較やグループの意見の集約、より深い学びへの気付きなど、どのようなことができることが到達点なのかを示しつつ適切な評価をしていく必要がある。
- ② 個々の能力に応じた習熟度別学習を進めるに当たっては、教科の特性を活かし、個々の課題にあった学習内容を吟味し、生徒の自己達成感がもてるようにしていく必要がある。特に、国語や数学、外国語（英語）等の習熟度別学習課題を増やしていくことが重要である。
- ③ 土曜塾の実施においては、ボランティア指導員に依存する割合が非常に高い。3年生の受験対策的な内容を継続するニーズが高い一方、1・2年生を対象とした基礎基本の習得をねらいとした講座の開催も検討する必要がある。そのためにも公募によるボランティア指導員の増員を広く呼びかけ人材確保を行う必要がある。
- ④ 家庭での学習習慣を新1年生から定着させるために、小学校5・6年生時の家庭学習状況を小学校との連携のなかで確認し、スタート時の丁寧な説明と継続の重要性を認知させるよう働きかける。また、学年が上がるにつれて自主学習ノートを継続していく困難さがあるので、生徒同士のノートを評価し合ったり、効果的なノート事例を例示することによって取組の継続性を高め、適切な指導言ができるよう教員体制の連携を図る。

(様式2)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名 (推進地域)	奈良県	番号	29
-----------------	-----	----	----

推進地区名	御所市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

「奈良県及び全国学力・学習状況調査の結果分析を踏まえ学習指導の改善を図り、児童生徒の学習意欲を高め、わかる授業、わかり合える授業の創造」

奈良県及び全国学力・学習状況調査の結果分析を踏まえ、本市及び各校の学力向上に係る課題を明らかにするとともに、その課題の共有を図り、学習指導の改善を行うことにより、児童生徒の学習意欲を高め、わかる授業、わかり合える授業を創造するための実践研究を推進し、その成果の普及を図ることにより本市児童生徒の学力向上、自尊感情の醸成に資することを研究課題とした。

2. 研究課題への取組状況

本市では、市教育委員会、市内各小・中学校が連携・協力し、上記の研究課題に迫るため、市内の全ての小・中学校を推進校とし、学力向上に取り組む「平成28年度御所市学力向上に係る取組（実践研究）」に取り組んだ。今年度は、以下の4点を重点課題とし、各校が実施計画を立て、実践研究し、実施報告を行うことで検証改善サイクルの確立を図った。

- ①奈良県、全国学力・学習状況調査等の結果分析を踏まえた学習指導の改善
- ②教員の授業力向上
- ③家庭学習における保護者との連携
- ④自尊感情、規範意識の向上と集団づくりの推進

市教育委員会は、各推進校の実践研究の指導・助言や下支えとなる事業を行った。

①について

(1) 推進校交流会の実施

奈良県及び全国学力・学習状況調査の分析結果と取組の交流を行う推進校交流会を平成28年11月15日に実施し、各校の課題や効果的な取組の共有、市全体の課題やカリキュラムマネジメントの必要性等の確認を行った。

②について

(1) 研究発表会の実施

本実践研究の成果を市内の学校で共有するとともに、講義を通して新たな取組のヒントを得ることにより、本市の学力向上に資することを目的として平成29年2月14日に研究発表会を実施した。対象は、市内小・中学校管理職及び学力向上担当教員等で、内容は、推進校より2校（県の指定校を除く）と教育委員会の発表とそれを踏まえ、奈良県教育委員会事務局学校教育課、椿本課長補佐より「学力向上に必要な視点と取組について」をテーマにご講義をいただいた。



(2) 実践事例集の発行

各推進校の実践研究の中で優れた授業実践を実践事例集にまとめ、年度末に市内小・中学校の全ての教員に配布する予定。

(3) 授業力向上サポーター事業の実施

市教育委員会が本市教員より授業力向上サポーターを委嘱（今年度は国語科、外国語活動の2名）し、市内教員の希望や当該サポーターの希望に応じて、授業提供を行ったり、指導助言を行ったりした。（協力校の大正小学校も活用）この事業により市内教員の授業力の向上を図り、教員間のネットワークを構築するとともに、児童生徒の学力向上につなげたい。

(4) ICT授業の推進事業の実施

県立教育研究所ICT教育推進係と連携し、電子黒板や書画カメラ等のICT機器、デジタル教科書を活用した学習指導の研修会を市内小・中学校3校で実施し、児童生徒に学習意欲を向上させる授業づくりの支援を行った。

③について

(1) 家庭教育推進事業の実施

規範意識の向上や、家庭生活の基本的な習慣の定着を図るため、「御所市家庭教育の手引き」をパンフレットで示し、新1年生の全保護者に配付した。その活用状況を調査したところ市内全1年生の98%の保護者にこの手引きを参考にしている。（平成29年2月23日現在）また、市内の各小・中学校も独自の家庭教育の手引きを作成し、家庭学習や基本的生活習慣の確立に向けた啓発を行った。

④について

(1) TFP（宝物ファイルプログラム）の共同研究

本市の児童生徒の自尊感情の醸成のため、大阪大学大学院岩堀氏の上記プログラムを市内小・中学校4校（協力校の大正小学校、葛上中学校も実施）で実施した。児童生徒は、宝物ファイルに自分の学びの軌跡や自分の大切なものなどをファイルすることにより、自己肯定感を高めていくことができた。



(2) 中学生キャリア教育フォーラムの実施

市内の中学生が一堂に会し、自分の夢を実現するための進路について考えるために上記フォーラムを平成29年2月2日に開催した。本市出身の現役プロボクサーや文化財技師のキャリアストーリーや高校の進学ガイダンスを通して、将来の夢の実現のための意欲を育むとともに夢に向かって努力することの大切さを再認識させる機会となった。



その他について

(1) 基礎学力推進事業の実施

児童生徒の基礎学力の定着と学習意欲の向上を図ること、漢字力や計算力を伸ばすことを目的として日本漢字検定の団体受検や役の小角杯（本市計算力大会）の受検を推奨し、受験する児童生徒には受験料の一部を市として補助を行った。

(2) 各推進校の取組について

効果的な取組例を2例紹介する。

①掖上小学校

- ・授業公開週間の実施や外部講師を招いた国語科の授業研修の実施。
- ・基礎基本の充実を図るための朝学習「すずかけタイム」や放課後学習「算数チャレンジ」の実施。
- ・家庭教育の充実を目指した「家庭教育の手引き」の配布や「家庭教育アンケート」を通じた保護者への啓発。
- ・自己肯定感を高める取組としての「宝物ファイル」やグループワークトレーニングの実施。

②葛小中学校（小中一貫教育校）

- ・学力向上実践研究推進委員会で小・中教員合同での9年間を見通したカリキュラムの整備。
- ・授業デザインのための全教員の授業公開日の設置。
- ・葛小中の学習スタイル、きまりの徹底。
- ・家庭学習充実のための自主学習ノートの活用。

3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 奈良県及び全国学力・学習状況調査等の結果から

奈良県及び全国学力・学習状況調査の結果から、市全体では小学校において県との平均正答率の較差が(0.6~3.7ポイント)縮まり、国語、算数ともに県平均正答率を上回る設問が見られるようになってきた。奈良県学力・学習状況調査では本市推進校の掖上小学校、全国学力・学習状況調査では協力校の大正小学校の学力が大幅に改善された。また、小中一貫教育に取り組む葛小中学校は、小学校、中学校ともに県平均を上回っている。学習意欲については、「国語が好き」である割合が昨年度に引き続き、県平均を上回り、改善傾向が見られる。

(2) 学力向上に向けての各校の意識の向上と中学校区の実践の充実

市内の推進校では、例えば、「全国学力・学習状況調査の全国平均正答率との乖離を1.0ポイントとする」「授業がわかる生徒の割合を80%以上にする」等のようにエビデンス(検証可能な数値目標)を明確にした実践研究の計画を立て、それに基づき取組を進めることができた。

昨年度に引き続き、中学校区においても学力向上に向けた公開授業研修を行った。今年度はさらに、協力校である葛上中学校がリーダーシップを発揮し奈良県及び全国学力・学習状況調査の結果分析を中学校区で行い、小・中学校の教員による国語、算数・数学の系統性や発達段階を踏まえた課題の共有や授業改善策の検討を行うことができた。

4. 今後の課題

奈良県、全国学力・学習状況調査等の結果分析を踏まえた学習指導の改善への各校の意識が高まり、全国学力・学習状況調査の児童・生徒質問紙から授業の中で目標を提示したり、話し合い活動を取り入れている回答の割合は、県平均を上回っている。しかし、「授業内容がよくわかる」や「話し合いで自分の考えが広まったり、深まったりした」割合は県平均を下回っており、研究課題である児童生徒の学習意欲を高め、わかる授業、わかり合える授業についてまだまだ課題が見られる。

本市の児童・生徒の学力の状況は、依然として県平均を下回り、低学力層の割合も県に比べて高い。次年度に向けて、市教育委員会としてさらに児童生徒の学習意欲を高め、わかる授業、わかり合える授業を創造するための指導・助言や学校の取組を下支えする事業を充実していく必要がある。

また、本市が県平均を下回っている質問はクロス集計すると学力との相関関係が高い。市教育委員会として総合的に児童生徒にどのような力をつけていくのか明らかにし、その力を総合的に育成することで学力向上を目指す新たなプランを策定する。さらに、具体的な指標を作成し、その指標に基づき取組の成果を見える化することで確実に実践研究の検証改善を行っていききたい。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

協力校名	奈良県御所市立大正小学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

平成27年度の全国学力・学習状況調査（6年）や奈良県学力・学習状況調査（4年）、また、県の国語と算数の学力診断テスト（全学年）の結果において、平均正答率が全国平均あるいは県平均に比べ、10点から20点下回っている。また、自己肯定感や規範意識が低く、学習意欲も低い。さらに厳しい家庭環境におかれた児童が多く、家庭学習の習慣が身についておらず、学習内容が定着しにくい状況にある。

2. 協力校としての取組状況

上記の実態から、3つの重点課題を設定して取り組むことにした。

- (1) 学習の基本である「聴く」力の育成
- (2) 学習意欲を高める体験的な学習やICTの活用
- (3) 学習意欲につながる自尊感情の醸成

具体的には、これまでから本校が取り組んできた業前の朝のび学習（計算、漢字、全校読書、読み聞かせ）を継続して取り組むとともに、次の5点について研究を推進することにした。

①話し手に体を向ける聴き方のスキルを身に付ける。

全職員が「聴く」ことを意識しながら、学級指導や全校集会の場を通して、話し手に体を向け、傾きながら話を聴くことを指導する。



②国語科を中心に聴き合い、学び合える授業づくりを行う。

県の指導主事や外部講師を招聘し国語科の校内授業研究会を行い、毎時のめあての確認、指導者の発問に対して自分の意見を書く場面、小グループで交流する場面、それを全体に伝え合う場面、学習を振り返る場面を入れた国語科の授業モデルを作り、各学級で実践する。



③児童の興味・関心を高めるための授業内容、授業方法の工夫を行う。

地域の方や企業に協力を求めながら、体験的な学習を取り入れた授業を取り入れる。地域の老人クラブによる昔の遊びやくらしの学習、地域たんけん、地域の特定野菜づくりや地場産業への見学、商業施設での職場体験、マヨネーズや吉野葛、電気についての体験学習など、児童が主体的に学習に取り組むことができる内容を授業に取り入れる。



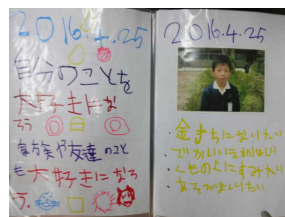
④児童のコンピューター活用能力を高める。

教師が授業でコンピューターを活用して指導するだけでなく、児童自らがインターネットを使って調べ、写真やグラフを貼り付けた新聞等の文書やプレゼンソフトを活用して発信できる技能を身に付けるために、指導計画を見直し、学年に応じたコンピューター活用能力を高めるよう系統だった指導を行う。



⑤岩堀美雪氏の理論によるパーソナルポートフォリオ（宝物ファイル）に取り組み、学習意欲につながる自己肯定感を高める。

職員研修で岩堀氏から直接指導を受け、全校体制でパーソナルポートフォリオに取り組む。個人ファイルを持たせ、自分の宝物（写真、賞状、テストなどをファイリングしていく。また、家族や学級の児童からの評価（いいところ）も書いてもらい、同様にファイリングしていき、自己肯定感を高めていく。また、たてわり活動（遊びやそうじ）などを取り入れたり、委員会の活躍の場を増やして全校の前に児童が立つ機会を設けたりして、高学年の児童の責任を果たしたり、自信を高めたりすることで学習意欲につながる自己肯定感を高めようとする。



3. 取組の成果の把握・検証

「聴く」指導や自己肯定感につながる取組の結果、全校朝会は最後まで静かな雰囲気の中、実施できるようになった。授業のチャイムを守るなどの規律も少しずつではあるができてきて、学校全体が落ち着きが見られるようになった。

今年度の取組は一昨年度から取り組んでおり、今年度の4月に行った全国学力・学習状況調査結果に一部成果としてみることができる。資料①のとおり、まだまだ県や全国との平均点とは大きく下回っているが、一昨年度に比べると一定の成果が見られる。本校の場合、年度ごとの変動が大きく、取組の成果とは一概に言えない部分があるが、全国平均値との差は大きいものの昨年度に比べ、その差は縮まっている。

【資料①】全国学力・学習状況調査の調査結果

	H27年度 全国平均との差	H28年度 全国平均との差	H27年度との差
国語 A	-16	-10	+6
算数 A	-20	-15	+5
国語 B	-29	-14	+15
算数 B	-20	-13	+7

【資料②】県学力診断テストの結果①（県比較）

	国語			算数		
	H27県との差	H28県との差	前年度との差	H27県との差	H28県との差	前年度との差
1年	-10.2	-2.7	+7.5	-10.3	-9.2	+1.1
2年	+8.4	-10.2	-18.6	+9.5	-4.1	-13.6
3年	-16.9	+9.2	+26.1	-24.2	+3.4	+27.6
4年	-18.8	-5.6	+13.2	-16.1	-2.0	+14.1
5年	-6.7	-20.1	-13.4	-18.8	-15.9	+2.9
6年	-0.6	-10.1	-9.5	-16.0	-15.3	+0.7

【資料③】県学力診断テストの結果②（前学年時との経年比較）

	国語			算数		
	H27県との差	H28県との差	前学年時との差	H27県との差	H28県との差	前学年時との差
1年		-2.7			-9.2	
2年	-10.2	-10.2	0	-10.3	-4.1	+6.2
3年	+8.4	+9.2	+0.8	1.4	+3.4	+2.0
4年	-16.9	-5.6	+11.3	-24.2	-2.0	+22.2
5年	-18.8	-20.1	-1.3	-16.1	-15.9	+0.2
6年	-6.7	-10.1	-3.4	-18.8	-15.3	+3.5

また、資料②資料③は11月に実施した県学力診断テストの結果である。まだまだ県の平均値とは大きな開きがある。特に高学年については顕著である。しかし、資料③のように経年的に見てみると、前年度に比べ、県との差が縮まっている学年が多いことが言える。取組の一定の成果として考えることができる。

4. 今後の課題

「聴く」ことをテーマに全校体制で取り組んだ結果、成果として見ることはできるが、まだまだ主体的に学習に取り組む意欲までは十分高めることができない。これは、授業者側もまだまだ教授型の一斉授業から脱却できずにいることも一因であると考えられる。子どもどうしが学び合うスタイルの授業形態を構築していく必要もある。

また、学習規律と学力との関係も見ていかなければならない。学習規律を身につけた児童を育てるための学級経営が求められる。

最後に、本校にとって家庭学習が十分ではないことが大きな課題である。家庭学習が単に反復練習して定着を図る内容の宿題が中心で、自分で復習や予習など自主学習まで指導できていないことが課題としてあげられる。系統立った家庭学習のてびきを示し、家庭にも協力を得ながら、主体的に取り組める家庭学習の定着を図る必要がある。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

協力校名	奈良県御所市立葛上中学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

平成26・27年度の2年間の取組の中で、授業で獲得した知識や学習内容の定着に向けては、一定の成果が出てきている。しかし、問題解決的な授業の学習過程の中で、『授業の初めに授業の目標・目当てを示している』の項目で、肯定的に答えている教員の割合は90%を超えているのに対し、生徒の肯定的な回答は65%にとどまっている。教員側が伝えているつもりになっていても、実際に生徒に目標・めあてが伝わっていない現状ある。また、『授業の終わりに授業の振り返りが行われている』のアンケート項目では教員33%、生徒44%の低位の割合にとどまっている。

また、グループ学習については昨年度より効果が出てきているが、これまで以上に『考える力』・『伝える力』の育成が必要である。また、主体的に学習に取り組む姿勢の育成のために問題解決的な授業のあり方を検討していきたい。

2. 協力校としての取組状況

1. 重点課題への取組状況

【目当てと振り返り】

昨年度よりも『目当て』の提示がわかりやすくなるように、また、どの教科でも『目当て』が提示できるように、ホワイトボードなどを活用して『目当て』の提示をした。

『振り返り』に関しては、先進校視察なども行いながら、『まとめ』と『振り返り』のちがいについての話し合いを教職員間で行った。『まとめ』ではなく『振り返り』を意識した授業を行うとともに、生徒に対しても『振り返り』活動を意識させるようにした。



【考える力・伝える力】

昨年度より行っている『問題解決的な授業の学習過程』の活用により、〔解決活動〕の時間を充実させることができてきた。毎時間、グループ学習の時間がとれるわけではないが、とるときには時間をかけてグループ学習の時間を確保できており、話し合いも深まってきている。



【自主的な学習活動】

3年目になる形成テストや学力補充の時間、夏休み期間中のハッピーウィークなど学力向上に関わる取組を今年度も行ってきた。そういう活動の成果が出てくる中、生徒会の3年生が中心となって、後輩に学習の仕方をアドバイスしたり、悩みを聞くことなどを目的として、定期テスト前の3学年全体で行う学習会を企画開催した。学年の垣根を越えて交流することでコミュニケーション能力の向上にも役立った。



【中学校校区学力向上】

今年度から、中学校校区で2小1中の学力向上担当者が集まり、奈良県学力・学習状況調査や全国学力・学習状況調査の結果の分析を行った。その中で、校区の児童・生徒に共通する課題や、学力向上に向けての悩みを交流し合った。今後は、研究授業の交流なども行っていく予定である。

平成 28 年度 葛上中学校校区 奈良県学力学習状況調査結果分析
【名柄小学校】
【葛城小学校】
【葛上中学校】

3. 取組の成果の把握・検証

2月に生徒対象に行った学力向上に関するアンケートの『形成テストをすることで、基礎基本の内容が理解しやすくなっている。』の項目で、肯定的に答えている生徒の割合は全体で87%（昨年度84%）で、取組の成果が見られる。

また、『中間テストや期末テストの前に形成テストを活用して学習している。』の項目で、肯定的に答えている生徒の割合は65%（昨年度56%）を超えている。3年目を迎えて、形成テストの活用が、生徒・教員ともに定着してきている実態が見られる。

形成テストの活用により、昨年度に引き続き、定期テストの5教科の得点で500点満点中200点を下回る生徒の割合は、15%を下回っており、500点満点中100点を下回る生徒は、学年によっては1人もいないか、いてもその割合は4%程度である。

学力向上に関するアンケートで『授業の初めに目標（めあて・ねらい）が示されている。』の項目で、肯定的に答えている生徒の割合は87%（昨年度84%）を超えている。また、『授業の終わりに授業の振り返りが行われていると思う。』の項目で、肯定的に答えている生徒の割合は55%（昨年度44%）を超えており、少しずつではあるが成果が見られてきてい

る。『授業の終わりに授業の振り返りが行われることで授業がわかりやすくなっている。』の項目で、肯定的に答えている生徒の割合は65%を超えており、振り返りに対する意識を教職員・生徒ともに高めていきたい。

中学校区（小学校2校・中学校1校）で奈良県学力・学習状況調査や全国学力・学習状況調査の結果の交流を行うことで、校区の課題が少しずつ見えてきている。

4. 今後の課題

2月に生徒対象に行った学力向上に関するアンケートの『授業の終わりに授業の振り返りが行われていると思う。』の項目で、肯定的に答えている生徒の割合は全体で55%（昨年度44%）で、昨年度よりは改善されているが、まだ十分ではない。また、『授業の初めに授業の目標（めあて・ねらい）が示されることで授業がわかりやすくなっていると思う。』の項目で、肯定的に答えている生徒の割合は全体で58%（昨年度65%）と低くなっている。さらに、教員向けの学校評価アンケートの『すべての生徒が、授業のはじめに提示された課題に対して活動をしている。』『すべての生徒が、1時間ごとに自分が学んだ事のふりかえりをノートなどに記入している。』の項目で肯定的に答えている教員の割合が50%に満たない。このことから、授業の初めに目標（めあて・ねらい）は提示されているが、それが振り返りと連動していないという課題が見えてきた。『めあて』に対して、肯定的に答えている生徒の割合が高いのに、教員の割合が低い要因の1つとして、これまで以上に『めあて』や『振り返り』に対しての教員の意識は高くなってきたが、具体的にどうすれば良いのかがわからないで悩んでいることが考えられる。今後、教員間で更なる研究を深めて、取り組んでいきたい。

中学校区で学力・学習状況調査の結果の交流を行うことで、校区の課題が少しずつ見えてきているが、見えてきた課題に対する取組の検討及び交流は、まだできていない。今後、合同の研究授業などを行いながら、課題の克服に努めていきたい。

また、10月に生徒対象に行った学校評価アンケートの『宿題や自主学習など家庭学習をしている。』の項目で、肯定的に答えている生徒の割合は全体で60%程度にとどまっており、新しい自主学習支援ノートの作成と自主学習ノートの活用を、今後進めていきたい。

生徒対象に行った学校評価アンケートの『グループ学習のある授業はわかりやすい。』の項目で、肯定的に答えている生徒の割合は全体で50%程度にとどまっており、グループ学習で学習する課題の精選やグループ学習の仕方などを検討していきたい。

(様式2)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名 (推進地域)	奈良県	番号	29
-----------------	-----	----	----

推進地区名	宇陀市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

- ・基礎学力の向上
- ・基礎学力向上のための指導力向上
- ・指導力向上のための研修の在り方の検討
- ・学習意欲向上
- ・家庭での生活習慣と学習習慣の確立

2. 研究課題への取組状況

(1) 学びの創造UDAプランの推進

推進目標 ○指導者の指導力向上 ・授業のユニバーサルデザイン（以下UD）化
・授業観察とフィードバック

○学ぶ意欲の向上

○家庭学習の充実

①各校園所1名の委員によって組織される推進委員会を中心に、市の課題について取組を依頼する。年間4回の推進委員会を開催した。

第1回 5/17 本年度の取組の重点の説明

第2回 7/4 授業UD化の研修会

8月末 各校園所の推進計画の取りまとめ

第3回 11/14 実践交流会

第4回 2/6 実践報告会及び研修

榛原幼稚園「健康な心と体を育て、友だちと一緒に考え主体的に活動する子どもの育成をめざして」

榛原小学校「UDの授業作りをめざして」

(協力校)

菟田野中学校「確かな学力を身に付け、主体的に学ぶ生徒の育成」
(協力校)

各校の実践報告のとりまとめ

②教育長による校園所長への実施状況ヒアリングと報告

③指導主事による1～5年目までの全教諭の授業参観・指導助言

④宇陀市家庭教育リーフレット（就学前版、小学校版、中学校版）作成、全保護者配付

(2) 宇陀市学力・学習状況調査 小5、中2対象に東京書籍学力テストを実施し小4～中3までの学力を把握

(3) 宇陀市教育センター研修（全21回）の実施

(4) 各学力調査の分析と課題整理

分析問題の形式、主旨から課題を分析、児童生徒質問紙などを経年比較した。基礎基本の定着とともに、資料の読み取りや表現（記述）力も課題がみられた。一方、小学校から中学校卒業段階にかけて、平均は全国平均に迫る傾向があった。

(5) 市教育委員会指導主事が協力校の校内研修会の研修講師として研修を行う。

11月16日奈良県教育委員会指導主事と共に菟田野中学校の校内研修で指導助言

2月15日奈良県教育委員会指導主事と共に菟田野中学校の研究授業で指導助言

3. 実践研究の成果の把握・検証(小学校全6校・中学校全4校)

(1) 授業のUD化の校内研修実施

小学校3校 中学校3校

(2) 授業のUD化について校内で一定の共通実施内容を決めた学校

小学校4校 中学校2校

(3) 授業参観週間等を設け、授業を見合う機会を増やした学校

中学校4校

(4) 小学校における授業においては、榛原小学校の検証では学習に対する愛校って期待度の数値が向上している。

(5) 家庭学習の充実に関しては具体的な指標を用いた検証が本年度はできていない。

4. 今後の課題

勉強がわからない、子どもができないのは、その子のせいではなく何か指導の手立てがあるはずだ。それを追求することが大切だという立場に立つ。このような考え方にもとづいて授業のUD化をすすめている。積極的にすすめている学校においては一定の子どもの意欲の上昇が認められる。一方、全国学力・学習状況調査を分析すると、宇陀市の児童においては「資料等から必要な情報を抽出し自分の考えを表現する力」に課題が見られる。このことから、この方面からも授業改善の必要性がある。

また、家庭学習習慣の定着もなかなか改善されない課題である。本年度は、市でリーフレットを作成し全保護者に配付したが、配付するだけではなく、具体的で継続的な取組が必要である。この点に於いて、来年度は各学校独自で家庭学習に関する共通理解と具体的な取組の実施を依頼しており、市としてもこれを支援する研修等を実施する必要性を認識している。

また、全国学力・学習状況調査等を含め、学習状況調査を複数回行い、年度内での子どもの変容を客観的に把握していくことを市としても各学校に実施を促す必要がる。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究(小・中学校)」
平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

協力校名	奈良県宇陀市立榛原小学校
------	--------------

○協力校として実施した取組内容

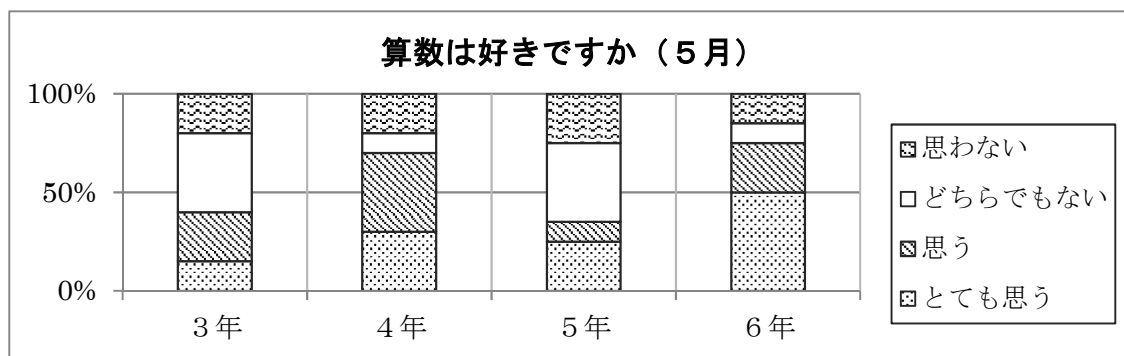
1 当初の課題

本校では、昨年度までの3年間「ユニバーサルデザイン」の視点からの授業づくりをテーマに、達成感を味わえるための多様な学びの研究を行ってきた。その成果として、前向きな姿勢で授業に臨む児童が多くなった。しかし算数科においては、算数が嫌いという児童もおり、学力向上につながりにくいという課題が見られた。

2 協力校としての取組状況

① 算数アンケートの実施

算数アンケートを実施し(3年生以上)児童の算数についての意識や実態を調査し、分析した。その結果、「算数が好き」と答えている児童は、学年が上がるにつれ(6年以外)少なくなる傾向にある。もっと話し合い活動の楽しさや効果を味わわせる必要があることも伺えた。教師の授業の工夫や改善が今まで以上に必要であると考えられた。



② 榛小デザインプラン

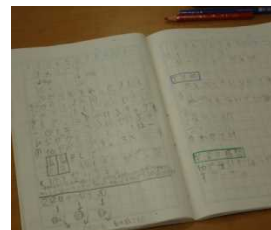
目指す子ども像を明確にし、それを達成するための主体的な学びの方法を考えた。その際手法に走るのではなく、この単元で付けたい力は何なのかを教員が把握し、「このような子どもを目指す!だからこういう授業をする」と具体的に考え、授業に臨んだ。



③自ら考える力

ユニバーサルデザインの視点からの支援を大切にしながら、全ての子どもが自分の考えをもてるような主体的な授業に取り組んだ。ノートの書き方をパターン化したり、具体物や半具体物を用意したり、ヒントコーナーを設けたりした。

I C Tを活用し視覚から理解できるようにもした。



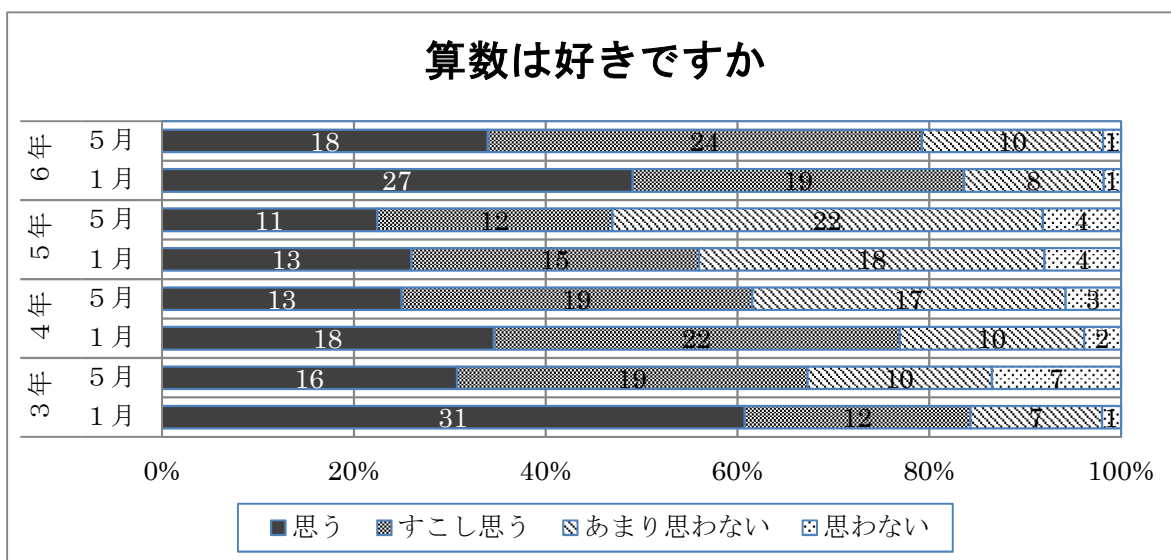
④ペア学習

主体的な学習の方法の一つとして、ペア学習に取り組んだ。自分の考えに自信をもったり、友達の考えを聞き、異なる考えにも気付いたりできた。



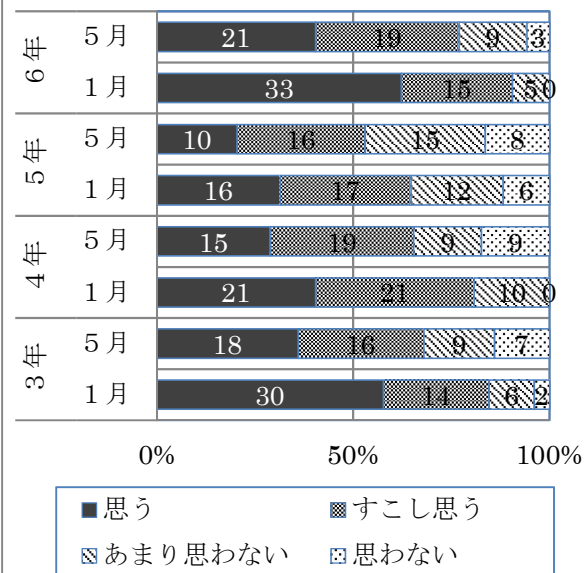
3 取組の成果の把握・検証

1月に、再度アンケートを行い1年間の取組の成果の把握と検証を行った。

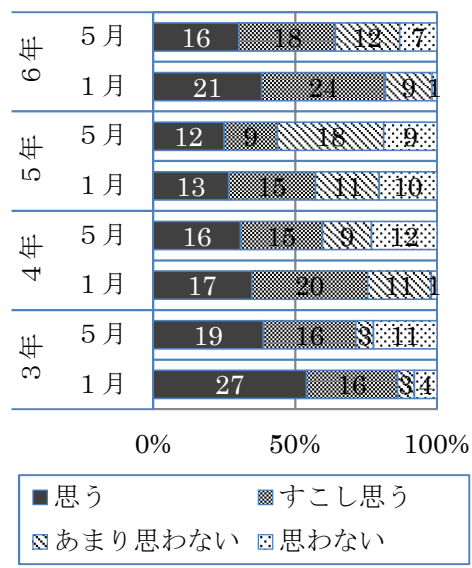


「算数が好き」と答えている子は、6年生を除き、学年が上がるにつれて少なくなる傾向にあるが、1月のアンケート結果で、「好き」と答えた児童が5月のときよりも各学年で5ポイント～15ポイント増えていることから、これまでの本校の取組の成果が出ているものと考えられる。

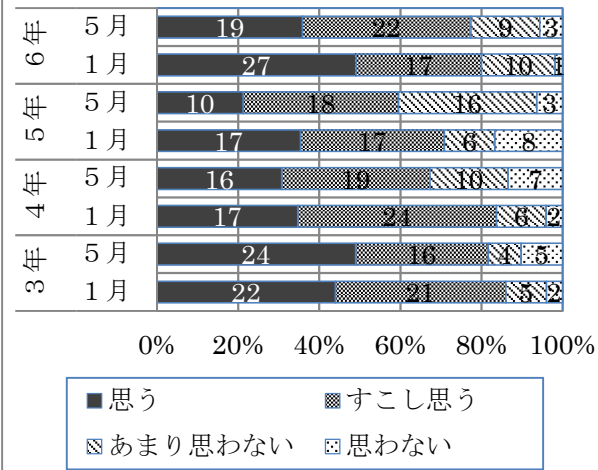
算数の授業は楽しいですか



ア自分で考えているとき



イ友達と話し合っているとき



算数が楽しいと思うのはどんなときかという問いに対して、「自分で問題の解き方を考えているとき」や「友達と問題の解き方を話し合っているとき」という設問場面において、「思う」・「すこし思う」と肯定的に答えた児童の数が5月より増えているのが分かる。このことから、それぞれの場面で子どもたちの学習意欲が高まったことがうかがえる。

4 今後の課題

算数に対する好感度が上がり、算数を楽しんでいる児童が増えた。しかし、教科等研究会が主催する学力診断テストの結果を見ると、全学年、県平均より低い。「算数が好き＝学力が高い」とは必ずしも言えない。自ら考える力やペア学習を1時間の授業の中でどう

生かし、次へどうつなげるのかという見通しをもち、授業を構成していくことが大事である。また、基礎学力を定着させる為にもこつこつタイム（朝学習）や家庭学習を充実させる手立てを考えていく必要がある。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成28年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

協力校名	奈良県宇陀市立菟田野中学校
------	---------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

- ・基礎、基本的な学力が定着しておらず低学力傾向にある。
- ・一中一小で変化がなく競争意識に乏しい。
- ・家庭学習の習慣が付いていない。

2. 協力校としての取組状況

【学力定着を目指して】

①職員研修の実施

「教えることは、変えること」

～あまり多くのことを多くのことを教えるなかれ。

しかし、教えるべきことは徹底的に教えるべし～

- ・6月・9月・11月・2月・・・年間4回実施。
- ・学力学習調査の結果を踏まえ分析を行う。分析結果は、過去の平均点との比較に終わらず、本校の生徒の強みと弱みを点検する。(言語活動の徹底)
- ・国語、数学の結果から課題克服のための他の教科でも出来ることはないかを確認する。
- ・授業規律の徹底 (チャイム着席・チャイムチョーク)
- ・授業力向上 授業のUD化を全教科で実施し分かりやすい授業の徹底
～難しいことを易しく(優しく)～
できた達成感、できそうな見通しを立てた授業をすすめて自己肯定感を高めた授業づくりを徹底する
- ・家庭学習の充実

②研究授業の実施

- ・公開授業（英語・数学・美術・道徳）全学年
- ・校区内小学校への授業参観（算数（年間2回）・オープン参観（全職員参加））
- ・県内学力向上実践研究推進先進校への授業参観
- ・教育講演会の実施
- ・校区小学校との英語の授業連携

③土曜塾の実施

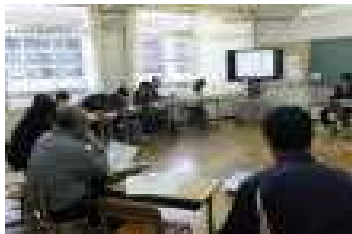
- ・9月～2月の毎週土曜日（9：00～12：00）
- ボランティアを募集し年間21回実施 学年の80%が出席し学習をした

【家庭学習の定着を目指して】

- ①毎週月曜日を（ノ一部活動デー）家庭学習の日と設定
- ②保護者に対して、携帯、スマホ・テレビ、ゲームをする時間を設定協力
- ③基礎編・一般編・応用編のワークブックを（個人選択）をもたせ、家庭学習用として利用する。
- ④宿題と授業とのつながりをもたせる
- ⑤課題として与えた宿題は必ず点検をし返却する
- ⑥教室宿題黒板を設置する

【参考資料】

[学力向上研修]



[生き方学習会]



[携帯・スマホ講習会]



[ITC研修]



[研究授業①]



[先進校への授業参観]



[授業研修]



[研究授業②]



[土曜塾]



3. 取組の成果の把握・検証

- ・職員研修や授業研究を積極的に進めたことで教職員の意識が大きく変わったことは成果としたい。
- ・授業の変化（授業のUD化、ITC教材の利用）
- ・地域の教育力を活かした補習授業の実施
（長期休業中の補習授業、放課後学習会、土曜塾）等の実施 各学年とも80%を超える参加率
- ・生徒が少しずつではあるが落ち着き授業に取り組むようになってきた。
- ・宿題の提出率は、前年度は70%程度であったが85%を超えている。特に1、2年生では90%を超えた。

【学校評価アンケートより】

(教職員) A当てはまる	Bどちらかと言えば当てはまる
Cどちらかと言えば当てはまらない	D当てはまらない

- ①授業開始時には、学習に臨む準備や態度を整わせてから授業を行っている
27年度：A 50% B 50% C 0% D 0%
28年度：A 67% B 33% C 0% D 0%
- ②日頃の授業では、「ここは聞くところ」などの指示を明確に示し、生徒の行動を確認してから次の指示を与えている
27年度：A 45% B 55% C 0% D 0%
28年度：A 67% B 33% C 0% D 0%
- ③日頃の授業では、具体物や資料などを使って授業をしている
27年度：A 36% B 64% C 0% D 0%
28年度：A 33% B 60% C 7% D 0%
- ④授業では、できるだけポイントを整理して指導するようにしている
27年度：A 45% B 55% C 0% D 0%
28年度：A 67% B 33% C 0% D 0%
- ⑤授業では自分にしかできないことやひと工夫を継続している
27年度：A 27% B 55% C 18% D 0%
28年度：A 60% B 33% C 7% D 0%
- ⑥家庭学習については、生徒が取り組みやすい提示や具体物を指示している
27年度：A 27% B 36% C 27% D 10%
28年度：A 27% B 46% C 27% D 0%
- ⑦生徒の実態に応じた教材工夫をしている（視覚化・焦点化・単純化）
27年度：A 18% B 55% C 27% D 0%
28年度：A 33% B 67% C 0% D 0%

(生徒) A当てはまる Bどちらかと言えば当てはまる
Cどちらかと言えば当てはまらない D当てはまらない

①チャイム着席ができていますか

27年度A 47% B 34% C 11% D 8%

28年度A 43% B 38% C 14% D 5%

②授業中、先生が説明している時私語無く集中していますか

27年度A 41% B 28% C 23% D 8%

28年度A 51% B 28% C 17% D 4%

③授業は分かりやすいですか

27年度A 11% B 45% C 27% D 17%

28年度A 18% B 52% C 17% D 13%

④家庭での学習をしていますか(学習の目安: 1年1時間 2年2時間 3年3時間)

27年度A 27% B 26% C 23% D 24%

28年度A 27% B 30% C 22% D 21%

⑤適切に学力や努力が評価されていると感じていますか

27年度A 23% B 52% C 13% D 12%

28年度A 16% B 51% C 20% D 13%

(保護者) A当てはまる Bどちらかと言えば当てはまる
Cどちらかと言えば当てはまらない D当てはまらない

①お子さんへの学習指導にシラバスを活用していますか

27年度A 8% B 21% C 46% D 25%

28年度A 6% B 30% C 44% D 20%

②お子さんは授業がわかりやすいと言っていますか

27年度A 4% B 29% C 45% D 22%

28年度A 6% B 51% C 24% D 19%

③お子さんは家庭学習をしていますか(学習の目安: 1年1時間 2年2時間 3年3時間)

27年度A 18% B 22% C 28% D 32%

28年度A 25% B 24% C 34% D 17%

4. 今後の課題

- ・言語活動の取組を全ての教科領域で取り組む
『読む力、書く力、話す力』の育成
- ・粘り強く最後までやり抜く力の育成
- ・家庭学習時間の確保
- ・部活動との両立
- ・授業規律の徹底
- ・校区小学校との連携強化
- ・改善はしているものの、教員の感じているところと保護者や生徒の感じているところの差を埋めていかなければならない